

# 「中級」日本語教育に向けての教師支援 —インドネシア ジャボデタベック地区での高等教育支援報告—

渡辺 由美

## 0. はじめに

報告者は2003年4月より2006年6月まで、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターに日本語教育派遣専門家として赴任した。任期中の報告者の主担当業務は、ジャボデタベックと呼ばれるジャカルタ首都圏地区<sup>1</sup>における高等教育支援すなわち大学の教師への支援であった。本稿は任期中の主担当業務における課題とそれに対する対策・成果について報告するものである。

## 1. インドネシア概要・教育事情

### 1.1 地理・民族・宗教等

インドネシア共和国は、ジャワ島・バリ島・スマトラ島・スラウェシ島など多くの島からなり人口約2億1700万人であるが、その約6割がジャワ島に集中する。ジャワ族（ジャワ島）、スンダ族（ジャワ島西部）、バタック族（スマトラ島）などの民族に分かれ、それぞれ異なる言語・風俗・習慣を持つ。公用語はインドネシア語。日常生活では地方語（150～250）が使用されている。主な宗教はイスラム教(87.1%)、キリスト教(8.8%)、バリヒンドゥー教(2.0%)<sup>2</sup>である。

### 1.2 教育事情・日本語教育の経緯

インドネシアの教育制度は6・3・3制であり、義務教育は小学校、中学校であるが中学卒業の学生の就学率は45%ほどである。日本語教育機関数は、全体数608校、学習者85,221名、教師1,702名、このうち高等教育機関数は78校、学習者11,381名、教師650名である。

インドネシアにおける日本語教育には、以下のような経緯がある。

- 1934年 学校教育で初の日本語教育導入（西ジャワ州バンドン市私立クサトリアン学院）
- 1942～45年 日本軍政の一環として初等教育から高等教育まで必須科目
- 1962年 高校での日本語教育開始（選択科目）

- 1963年 国立パジャジャラン大学日本語日本文学  
科開設
- 1969年 日本大使館広報文化センター 市民向け  
日本語講座開講
- 1990年 インドネシア大学大学院日本研究コース  
修士課程開設
- 1995年 インドネシア大学大学院日本研究コース  
博士課程開設
- 1999年 インドネシア日本語教育学会 設立
- 2001年 インドネシア教育大学 日本語教育研究  
修士課程開設
- 2006年 パジャジャラン大学 日本語研究  
修士課程開設<sup>3</sup>

## 2. 派遣先地域概要、担当業務報告

### 2.1 ジャボデタベック地区の日本語教育の特徴

2007年8月現在、インドネシアには国際交流基金からの日本語教育派遣専門家（以下専門家）が計6名派遣されている（北スマトラ州1名、ジャカルタ日本文化センター2名、西ジャワ州1名、中部ジャワ州1名、東ジャワ州1名）。また、ジュニア専門家は計5名派遣されている（ジャボデタベック地区、西ジャワ州、中部ジャワ州、バリ州、北スラウェシ州 各1名<sup>4</sup>）。

報告者の担当した当初の、ジャボデタベック地区の大学は、S1と呼ばれる4年制プログラムと、D3と呼ばれる3年制プログラムのある機関を併せて、計11大学<sup>5</sup>であった。このうち私立大学は9校で学生数約2000名、06年9月より正式にS1プログラムを開講したジャカルタ国立大学を含め、国立大は2校で学生数約250、教師数は合計200名余りであった。またクルススと呼ばれる民間日本語学校は約50機関、学習者約2500名、教師は200名ほどである<sup>6</sup>。

### 2.2 日本語教育派遣専門家としての主担当業務

国際交流基金ジャカルタ日本文化センター（以

下センター)における報告者の主担当業務は、ジャボデタベック地区の高等教育機関(大学中心)の教師・機関支援活動であり、着任当初(03年度)は初級教授法の支援が中心であった。支援対象別に主な支援活動を表にすると、表1ようになる。

表1 主な支援活動(支援対象別)

	若手教師向け研修	一般向けセミナー	日本語教育学会	大学別の希望者
支援活動の種類	初級教授法研修 <sup>7</sup>	日本語教育文法一日セミナー	学会共催セミナー	11 大学定期訪問
	初級教授法フォローアップ研修	技能別教授法セミナー	学会研究会 学会土曜勉強会	

### 2.2.1 若手教師向け研修・一般向けセミナー

センター主催で行った支援活動である。専門家がセンターのインドネシア人専任講師と共に初級教授法についての研修の企画・運営をおこない講師を務める。

### 2.2.2 インドネシア日本語教育学会<sup>8</sup> ジャボデタベック支部<sup>9</sup> 支援

インドネシア日本語教育学会(以下学会)の活動は学会主催で、会長他役員中心に初級の文法や教授法セミナーの企画・運営・実施をおこなった。専門家はセンター専任講師と共に、セミナーや研究会の運営・内容決定の支援、発表者サポートなどを側面的におこない、講師として出講することもある。

### 2.2.3 11 大学定期訪問

ジャボデタベック地区 11 大学(S1, D3 プログラムのある機関)の希望者を対象に、初中級の文法解説、5 学期以降の教授法を中心に助言をおこなった(1 機関、月 1 回程度訪問)。

## 3. 中級日本語教育に向けた実践

### 3.1 ニーズ調査

#### 3.1.1 地域のニーズの段階的把握(学会共催セミナー・高等教育機関調査・大学定期訪問)

大学定期訪問(前述 2.2.3)の際、教師達から「中級の教え方がわからない。何を使って良いかわ

からないし、選択肢がない」との相談を頻繁に受け、初級教材終了後の 4,5 学期(2 年次の後期から 3 年次)以降の授業に不安を持っている教師が多いという事実が明らかであった。このため、大学定期訪問の際には、中級教材の勉強会や、教授法の紹介をするようにしていた。

また報告者の着任当初の 2003 年 8 月、上記 2.2.2 学会ジャボデタベック支部主催の第 3 回共催セミナー<sup>10</sup>がおこなわれた。テーマは「大学における中級日本語教育の問題」であったが、これは「中級」<sup>11</sup>に対する地域の教師達のニーズ・問題を探りそれに応えようと、当時のセンター専門家とセンターインドネシア人専任講師が企画したものであった。当初ジャボデタベックの教師達が抱えていた問題・ニーズ、続いておこなったニーズ調査から把握されたものを表にまとめると、表 2(次頁)のようになる。

さらに地域の教師の現状を知るため、03 年 9 月から 04 年 9 月にかけて、ジャボデタベック地区高等教育機関調査として 11 大学のインドネシア人教師 80 名に対し、任意のアンケート調査をおこなった(資料 1「高等教育機関調査票」参照)。回答者のうち、日本語能力試験(以下能力試験)3 級に合格している者あるいはそれ以上の日本語力をもつ教師が 50 名程度であった。すなわち当初、この地区には 3 級程度の教師が多く存在しているという現状があり、報告者は支援における重点課題の対象を、「能力試験 3 級程度の教師」としていたのである。

### 3.1.2 最終ニーズ調査

2004 年 3 月「学科長意見交換会」<sup>12</sup>が行われた。この意見交換会は、地域の大学の学科長からの要請に応えセンターが主催したが、9 大学の学科長らから、地域の最終的なニーズとして、ニーズ①・②(次頁表 3 参照)のような教師達の声が、具体的に報告された。

## 3.2 ニーズに対する支援

### 3.2.1 「中級日本語研修」

上記最終ニーズ①「教師の日本語力向上」を望む声が多くあったことから、ジャボデタベック地区の支援における重点的な課題の 1 つは、能力試験 3 級程度の日本語力で 5 学期すなわち 3 年生以上を教える日本語力・自信のない教師のために、「中級を教える日本語力」を養成することであることがはっきりした。このため、それまで休止していた「教師向け日本語講座」を 2004 年 7 月に再開することに

表2 段階的なニーズとその対応

03年8月 学会共催セミナー	・文型積上げ式の初級教材からトピック・技能シラバスの中級教材へうまく移行できない。	→段階的にニーズ調査を行う →その後のセミナー・勉強会でも中級教授法を扱う
03年9月～04年9月 高等教育機関調査	・教師自身が日本語能力試験3級程度で「中級」を教える自信がない。	→地域支援の重点課題対象を能力試験3級程度の教師とする
月1回程度 大学定期訪問	・何をどのように教えれば良いか、中級教材の情報・教え方の具体的モデルがほしい。	→大学定期訪問による中級教授法勉強会、中級教材の紹介など

表3 最終ニーズとそれに対応した支援方針の変更

04年3月 学科長意見交換会	ニーズ① 教師の日本語力向上 ・「中級(5学期)」以降を教えられるよう能力試験3級程度の文法項目理解を深め、最終的に能力試験2級程度の日本語力を目指し勉強したい。	→3.2.1 中級日本語研修
	ニーズ② 中級レベルの教授力向上 ・中級教材の使い方、アイデア、ヒントがほしい。 ・教材を持ち寄り、使い方の意見交換をしたい。	→3.2.2 中級教授法セミナー →3.2.3 中級技能別教授法勉強会

し、「中級日本語研修 コース1～4」<sup>13</sup>とした。

コース1,2の使用教材は「ニューアプローチ中級日本語 基礎編」。能力試験3級程度の教師達を対象とし、初中級の文法・語彙・表現知識の拡充と、談話レベルの文章の効率的理解を目標とした。

また、「中級授業のモデルがほしい」という要望に応え、日本語研修の授業計画やコース日程といった資料についても参考になるよう配布していた。コース受講者は半期ごとのコース修了時に全員事後テスト<sup>14</sup>を受けるが、1つのコースの修了時点で継続受講を希望する者は、そのコースの事後テストが、次コース新規受講者との共通入試となる<sup>15</sup>。

コース3,4の主教材は「ニューアプローチ中級日本語 完成編」を採用した。能力試験2級を目指す教師を対象とし、コース4修了時の目標を能力試験2級程度の知識・運用力とした。

「中級日本語研修」の成果を測る1つの指標として、04年度のコース2から、各コースとも修了時事後テストとして、過去の能力試験2級問題から抜粋した試験をおこない、到達度をみた。

04年度コース2の事前テストの平均得点率は55.6%、事後テストは58.0%であり、伸びはわずかであった。しかし、06年6月に修了したコース4の修了者のうち、コース3からの継続参加者11名についてみると、得点率は、コース3開始時の平均得点率59.0%から、65.6%へ6.6%伸びている。中には教師歴20年以上のベテラン教師もあり、「日

本語能力の向上」という目標のもと、全員が素直に謙虚に熱心に自己研鑽に励む姿は、感慨深いものであった。

コース修了時には「日本語の勉強を継続できる場があって、本当によかった。他の先生達と共に学ぶことで自信がもてる。もっと続けられる場がほしい」という声も多く聞かれ、教師同士の良き情報交換の場にもなっていたようである。

### 3.2.2 「中級教授法セミナー」

最終的に聞かれた地域の教師達のもう1つのニーズ、「②中級向けの教授力向上」であるが、中級向けの具体的な教材の使い方、アイデア、ヒントがほしいという声に対し、学会ジャポデタバック支部長からも「中級を教えている教師を集め少人数でも勉強会をしたい」、そして、「実際に教えている教師が、自分達の教材を持ち寄り使い方の意見交換をしたらどうか」という提案があった。

#### <04年 第1回中級教授法セミナー>

これを受けてセンターでは、それまでおこなわれていた初級授業向けの「技能別教授法セミナー」(表1「主な支援活動(支援対象別)」参照)を、中級授業向けの「中級教授法セミナー」とし、04年4月の第1回セミナーでは、「中級の読解」をあつかった。これは、「学生に長い文章を理解させるのが難しい、教師自身が読むのも時間がかかる、理解が困難」との声がよく聞かれるためだった。このセミナーでは幅広く「5学期以上を教えた経験をもつ教

師」として参加者を募り、「教えたことはあるが、日本語力にも教授力にも自信がない」教師中心と思われる53名が参加した。

このセミナーでは、「全体をつかむ（大意読み）」ために、文章の構造に注目させること、さらに教室活動において、学習者に読むヒントを与えるための「事前活動」をするということに焦点をあて、セッションの中で実際に文章を読み、文章構造・文章タイプを分析することを試みた。しかし、参加者の反応は「(文章構造や文章タイプの)説明が早い、難しい」、「普段自分がやっている活動(いわゆる精読)とかけはなれている」といったコメントであり、「すぐに授業(準備)に役立たない」と感じた教師も多かったようだ。セミナーを担当した報告者・インドネシア人専任講師は、実際に行われている授業の準備に応用しやすいものを提供していく工夫が必要であることを痛感した。またこのためには、可能な限り各機関の現状について情報収集をした上で、次のセミナーの企画を立てる必要があると感じた。尚、このセミナーのフォローアップとして、セミナーの参加者の一部を対象に、センターで開講している一般向け日本語講座<sup>16</sup>の中級クラスの見学(読解の授業)を実施したが、文法項目の扱い方などが参考になると好評であった。

### 3.2.3 日本語教育学会ジャボタベック支部主催「中級技能別教授法勉強会」発足

上記「中級教授法セミナー(センター主催)」の反省を踏まえ、「ジャボタベックの大学の現状に無理のない形で」の教室活動のアイデア・ヒントを提供していくことが必要であるとの話し合いが報告者、センター専任講師、学会ジャボタベック支部長の間でおこなわれた<sup>17</sup>。この結果として、「センター主催」の「中級教授法セミナー(前掲表1参照)」を、「日本語教育学会主催」の「中級技能別教授法勉強会」とした。名前ではなく具体的内容の変更として、センターの専門家や専任講師だけが講師を担当するのではなく、学会支部長をはじめ地域の教員が講師として自分の教室活動のアイデアを提供するという形への移行を試みた。

<05年 第1日本語教育学会ジャボタベック支部主催中級技能別教授法勉強会>

第1回は05年6月実施、テーマは「中級の会話授業」であった。地域の教師達は、特に「話す・書く」といったアウトプット活動について、どんな教

材で、どのような教室活動をすれば良いのか悩んでいた様子が見受けられたからである。

前述の通り地域の教員が講師として自分の教室活動のアイデアを提供することにしたが、今回の講師は2名とも学会役員であり、また大学の日本語学科長でもあった。実際の会話授業のヒントとして、講師達がこれまで使った教材の工夫・問題点を提示し、参加者が比較・検討できることを目的とした。

実施の前に、全7回の「事前勉強会」を実施し、内容を検討した。二人の講師と共に「アウトプットを促す授業活動とはどのようなものか」を検討していき、第1回の事前勉強会ではセンター専任講師から「読んだ文をもとに話すといった、技能統合型の授業を紹介するのが有効ではないか」という意見がでた。そして「それがジャボタベックの教員に実施可能か、受け入れられやすいか」を検討した結果、「簡単な読解リソースを用いた会話授業」という形で紹介すれば理解されやすいのではないかとアイデアがまとまり、学会支部長が授業の目的や流れ、もう一人の講師が自分の大学でおこなった授業をもとに「読解リソースからの会話練習」を紹介することになった。

参加する教師が短時間で内容を把握し、リソースの意味を理解するという意図から、当日紹介した読解リソースは、実際には初級用教材であった。この中に含まれる「意見の言い方」を使い、後で学生に会話練習をさせる流れを講師が紹介し、そのための準備(意見の部分をめきだす、言い方を紹介し練習する)やワークシート(実際に学習者が自分の意見を発表する際に使う)の作り方をタスクにした。

授業の流れやタスクの意味についてはよく理解され、ワークシート作りなども適切にできていた。しかし、質疑応答では「私の大学では読解の授業と会話の授業を一緒にすることは無理」、「会話に読解の教材を使うのはなぜか」といった意見が多く、技能統合の意義が理解されにくかったようである。また、一部の教師を除いては教師間の協力が難しいということも、参加者が感じている問題としてあがってきた。

<06年 第2回日本語教育学会ジャボタベック支部主催中級教授法勉強会>

第2回は、学会ジャボタベック支部長(以下支部長)とセンターのインドネシア人専任講師(以下専任講師)が講師となった。計4回の事前勉強会

を通し、二人の講師と報告者の間で「この地域の教師が自信を持つために本当に役立つ支援は何か」ということが綿密に議論された。報告者は助言を求められたり資料の提供が必要な際に側面的に支援し、あくまでも二人の講師主導でセミナーの企画をたててもらふことを試みた。

テーマは「中級の読解」とした。「地域の教師が自信を持って学習者にインプットからアウトプット活動をさせる」ための、具体的な工夫のし方を紹介することを目指した。初中級向けの読解リソースを用い、事前タスクによって内容を理解させやすくする工夫、学習した文型項目と同じような表現を使って、後で別のトピックについて話す練習をする工夫を紹介することにした。

まず、支部長が普通の授業の様子や問題点を聞き出しながら、「中級読解授業の流れと授業準備」について解説、さらに「事前タスク」の目的や種類について参加者に問いかけながら進め、参加者からは常に積極的な反応があった。

続いて専任講師のセッションでは、中級の読解授業で文法をあつかう際、どのような問題点があるのかを参加者と一緒に整理・解説し、その後既存の教材から例文を作成し直すワークショップ、さらに読解後の発展活動（会話・作文）について解説・紹介した。

適切な例文の選び方など、地域の教師が持つ問題点がよく配慮されており、ワークショップでも積極的に発表がされていた。読解活動からテーマについて話す、読解文中の文型を使って書くといった技能統合の要素を含む発展活動は、やはりすぐに実践するには難しい様子であったが、「大学のカリキュラム上読解授業は読解だけ。会話や作文と一緒にするシステムになっていないのが問題」、「読解を（精読で）完全に理解しなければ、会話でも使うのは無理ではないか」など、活発な意見交換があった。

事前勉強会でも「学習した項目を使うため、読んだ後に話す・書く活動へ」という専任講師の案と、「地域に無理なく受け入れられるには正確な理解の段階までの授業が大切」という支部長の考え方で議論となっていたが、実際のセッションにおいてもこの点が参加者間での活発な意見交換に発展した。これはこの勉強会の大きな収穫だったのではないかと考える。

#### 4. 成果と今後の課題

##### ニーズ①

：教師の日本語力向上に対する成果と課題  
→教師のための「中級日本語研修」を開講し、1年間以上の継続参加者については、能力試験2級程度の問題での得点率が向上したといえる。

また、一般講座で学生と肩を並べる状況ではやりにくい、という教師のための学習の機会が確立されたことで、教師の段階的な日本語力向上のための環境がある程度整った。さらにモデルとしての中級授業見学の場、地域の教師達の情報交換の場をも提供し得たといえる。

ただ、講座の受講生は1コース20名程度で参加できる教師の数は限られており、4コースを並行させて開講するなど要望に応えるための講師の人材確保は、今後の課題である<sup>18</sup>。

##### ニーズ②

：中級レベルの教授力向上に対する成果と課題  
→「中級の教え方がわからない。教材や教え方に選択肢がない」というのが地域で多く聞かれる声であった。これに応え、「中級教授法セミナー」さらに「中級技能別教授法勉強会」を企画し、一般向けにはほとんど紹介されてこなかった技能統合型の授業の紹介を、地域のリーダー達が試みた。この過程で彼らは「教師達の要望に応えるには何を提供すれば良いのか」、それが「地域の現状に合っているのか」、「無理なく受け入れられるものなのか」を議論し、検討することを経験した。そして参加者の間でも、「自分達の間で何が問題か」を出し合いながら、「提供された教授法について吟味し、取捨選択する」という過程が生まれた。これまでのセミナーや勉強会では、多くのインドネシア人教師達は与えられた情報を受け入れるだけで、受身であった。しかし同じインドネシア人のリーダー達から提供されたものを、教師達が自分で吟味し、意見交換し、そして選ぶという参加のし方に移行してきたのである。これは、大きな成果といえるのではないだろうか。

これまでのプロセスでは一部のリーダーが重要な役割を担い、彼らの「提供者」としての立場が全体の議論に大きな影響をおよぼしているが、今後はどんな立場の者が提供したものであっても、いかなる場であっても、参加者一人一人が各所属機関におけるリーダーとしての自覚を持ち、より活発に意見交換できることが望まれる。

## 5. まとめ

地域の教師のニーズに応え、教師向けの「中級日本語研修」そして「中級教授法セミナー」から「中級技能別教授法勉強会」へ、支援のあり方を検討しながら初級向け中心から中級向けの支援に移行させた過程は、報告者にとっても大きな収穫であった。地域の教師達は「自己研鑽する学習者」であり、継続的に学ぶことを非常に熱心に求めている。今後も成果が期待できる。

他方、彼らは「自らより良い授業を追求する教師」なのである。それまでの教授スタイルや信念を覆す、または環境や方法を大幅に変更せざるを得ないものが提供されたとき、教師達は抵抗感や違和感を覚える。そして、提供者が「絶対的な力を持つ者・常に優位な者」のではなく、対等に話し合える仲間（ピア）なのだと感じることができるなら、そのときこそ彼らは受身ではなくなり、取捨選択のための議論へと進むことができるのではないだろうか。

「提供したものがすんなり受け入れられず、失敗だった」で終わるのではなく、「なぜそのまま受け入れることが難しいのか」、「背景にはどのような環境や信念があり、より受け入れられやすくするにはどんな工夫が必要か」を共に考えることが重要である。学習者がより良く学ぶために、そして地域の教師が本当に自信を持って教えるためには、どこに焦点をあてるべきか。「有効・効率的」な情報提供と「地域の現状」との間で、常に模索していくことの大切さを、改めて感じた3年間となった。

謝辞 本稿の執筆にあたり、情報収集にご協力いただいた登里民子さん、吉田裕子さんを始め、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターの皆さん、国際交流基金よりインドネシア派遣の現・元日本語教育専門家・ジュニア専門家の方々に多くのご助言や励ましをいただきました。心よりお礼申し上げます。

## 注

1. ジャカルタ、ボゴル、デポック、タンゲラン、プカシの5つの都市を含む。行政区の変更以前は「ジャボタベック」と呼ばれた。
2. 外務省ホームページより
3. 国際交流基金2003年調査による
4. 東ジャワ州1名は07年に撤退。
5. 07年8月現在 さらに私立大学3年生プログラム1校が加わり、12大学となった。
6. 04年9月現在のジャボタベック高等教育機関調査による
7. 初級教授法研修については継続的に実施され、ほぼ定着の感があり、05年度は対象者が少なかったため、実施せず
8. 99年創設。07年8月現在、全国会長は西ジャワ支部ナンダン氏。05年全国セミナー時、参加会員約200名。推定会員総数約500名（流動的）。
9. 07年8月現在、支部長は元インドネシア大学日本語学科長レア氏。06年8月セミナー時、参加会員約90名。推定会員総数約250名（流動的）。
10. 実施会場 LIA 外国語大学。参加人数約70名。
11. この地区では、実際には初級テキスト終了直後の初中級段階である5学期すなわち3年生以上を「中級」とよんでいた。
12. 04年3月実施。地域の大学の学科長からの要請に応え、センターにおいて以下2つの目的でおこなわれた。1 「これまでのジャボタベック支援の業務について評価を受ける。」2 「1を踏まえ、今後の活動が有効なものとなるよう2004年度業務方針を説明し、意見を聴取する。」9大学の大学学科長と日本語教育学会ジャボタベック支部長が出席、センター日本語担当職員・日本語教育派遣専門家らが出席した。
13. 「研修」であれば、大学などの所属機関から仕事を休むことが許可されやすいという背景から、大学に勤務する教師が昼間の時間帯に参加しやすくするため、コース名を「講座」ではなく「研修」とした。
14. 事後テストは全コース共通で過去の日本語能力試験2級問題より抜粋。
15. 1コースは半期（3時間×18回）で修了。次のコースへ継続する者は、事後テストが次コースの事前テストとなる。継続希望者は、事後（事前）テストが基準以上であれば、コース1～4を継続して2年間受講することもできる。
16. 06年8月現在、センターで開講された社会人向け日本語講座は次頁表4のとおりである。
17. 05年度より、年度ごとにセンターへ支部活動報告を提出するため、事前に話し合いがもたれていた。
18. 07年8月現在、開講はコース2のみ1クラスで、受講者は25名。

表4 センター開講社会人向け日本語講座（06年8月現在）

	対象	目的	日時	定員	教材
中級	3級程度	3級以上の運用力	火木 18:30～20:00	25	『トピックによる日本語総合演習（中級前期）』
上級1	2級目標	4技能統合により産出力向上	水金 18:30～20:00	同上	『トピックによる日本語総合演習（中級後期）』
上級2	2級程度	口頭発表、レポート 作成上の正確な日本語	火木 18:30～20:00	同上	『トピックによる日本語総合演習（上級）』

参考文献

渡辺由美(2006)「インドネシアジャカルタ日本文化センター総合報告書 03年4月～06年6月」独立行政法人国際交流基金

渡辺由美(2006)「インドネシアにおける最新日本語現象」『South East Asia Summit on the Japanese Language Education Reports 報告書』国際交流基金ジャカルタ日本文化センター

松本剛次・小栗潔・西浦久子・登里民子・古川嘉子・森西志保子・渡辺由美(2007)「インドネシアの高等教育機関における中級日本語教育の現状と課題、そして

対策」『South East Asia Summit on the Japanese Language Education Reports 報告書』国際交流基金ジャカルタ日本文化センター

エフィルシアナ・稲見由紀子・亀田美保・衣笠秀子・小林佳代子・小部玲子・永井和子・新田洋子・松尾慎・矢沢悦子(2001)『インドネシアの高等教育機関における日本語教育実態調査 報告書』

外務省 HP インドネシア共和国

[www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/index.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/indonesia/index.html)

(2007/8/8 アクセス)

わたなべ ゆみ/シリア ダマスкас大学日本語学科  
yumicairo77@hotmail.com

稿末資料1 ジャボデータバック高等教育機関調査票

きょうし  
 < 教師データ >

ちょうさねんがっぴ  
 調査年月日 \_\_\_\_\_

しめい  
 氏名 nama :

じゅうしょ  
 住所 alamat rumah :

でんわばんごう  
 電話番号 telepon :

e-mail :

せいべつ  
 性別 jenis kelamin : 女 wanita / 男 pria せいねんがっぴ  
 生年月日 : \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

riwayat pendidikan : ( \_\_\_\_\_ だいがく いん \_\_\_\_\_ ねんそつぎょう  
 ) 大学(院) \_\_\_\_\_ 年卒業

がくい  
 学位 jenjang pendidikan yang telah anda capai S3 / S2 / S1 / D3

にほんごがくしゅうれき  
 日本語学習歴 : \_\_\_\_\_ 年から \_\_\_\_\_ 年 ( \_\_\_\_\_ 年間) \_\_\_\_\_ きかん  
 機関 ( \_\_\_\_\_ )

りゅうがくけいけん  
 留学経験 apakah anda pernah pergi ke Jepang? : \_\_\_\_\_ 年から \_\_\_\_\_ 年 ( \_\_\_\_\_ 年間)

\_\_\_\_\_ 年から \_\_\_\_\_ 年 ( \_\_\_\_\_ 年間)

\_\_\_\_\_ 年から \_\_\_\_\_ 年 ( \_\_\_\_\_ 年間)

にほんごのうりょくしけん  
 日本語能力試験 apakah anda pernah mengikuti ujian kemampuan brbahasa Jepang?

\_\_\_\_\_ ねん \_\_\_\_\_ きゅう  
 年 \_\_\_\_\_ 級 合格 / 不合格

にほんごきょうじゅれき  
 日本語教授歴 tahun mulai mengajar : \_\_\_\_\_ 年 ~ \_\_\_\_\_ ねんざい  
 年現在

しょぞくきかん げんざい  
 所属機関 (現在) と担当時間数 :

しょぞくきかんめい 所属機関名	たんどうかもく 担当科目	たんどうじかんすう 担当時間数
1		
2		
3		
4		
5		

\* 「担当科目」 (Mata kuliah yang diajarkan) - Tolong merubah semua mata kuliah yang diajarkan.

\* 「担当時間数」 (Waktu mata kuliah) - Tolong merubah jumlah TM dalam seminggu.

けんしゅう さんか  
 研修への参加 Apakah Anda pernah mengikuti penataran atau seminar

yang diadakan oleh JF? :

(ジャカルタ日本語センター)

ねんがっぴ 年月日	けんしゅうめい 研修名

うらわけんしゅう かんさいこくさい  
 (浦和研修センター / 関西国際センター)

ねんがっぴ 年月日	けんしゅうめい 研修名